

B-36 簡易染色の實際草木染について(第1報)  
聖カタリナ女短大 白石 方子

目的 春夏秋冬の季節に恵れた我が国では、四季それぞれ豊富に色鮮やかな草木、草花があり、身近な資料が試料として取りあげることができる。明治生水の人々の中には、幼い頃、ホーセン花、ひでり草のうす紅の汁をしぼって、爪にぬりつけて売んでいた話もあり、草花の強い色素を身の廻りに生かしていたことから、趣味深い色調を被服手工芸に利用することも、意味深いものであることからとりあげた。

方法 試料。愛媛県産出の強製紙使用。

○染液採集、草花の種類、ゼラニウム、苗、千急草、ゴゴニヤ、くちなし、ざくろ其他数種。

○着色の實際、媒染剤。

○応用作品と仕上げ方法(ゼラチン加工)

結果 強い紙、ねばりのある雁皮紙に染着したので破れることもなく、草木染の缺點といわれる、日光に弱く褪色しやすいとの心配もこの応用作品では集にならず、液としては、ゼラニウム、ゴゴニヤにおいては、鮮か度、量も多くとれてよかった。昔の人が織糸のわり糸といって先染めして織った、文化財的存ものもしのばれたのレリ。今回の紙製品を布に生かし、実用小物類に試作し美的な実験に続けたい